

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
(1) 夏秋果菜類 の栽培管理	(今月の作業のポイント) ○夏秋果菜類の栽培管理 ○いちごの炭疽病防除 ○冬春野菜の太陽熱利用による土壌消毒法 ○さといもの梅雨明け後のかん水管理 ア ほ場の排水対策 果菜類の根は、一般に酸素要求量が多く、降雨が続く土壌が水分過多になると気相率が低くなり、根の活力が低下しやすい。ほ場の排水性が悪いと湿害の原因となるため、畝間やほ場の周辺を点検し、雨水が速やかに排水されるよう明渠などを整備しておく。 イ 敷きワラによる地温抑制 梅雨明け後は日射量が増大し、高温・乾燥状態が続くため、株元にワラを5 cm程度の厚さで敷き、地温の上昇を防ぐ。 早い作型の果菜類では、茎葉が繁茂して株元に直射日光が当たらず、比較的地温は上がりにくいものの、定植直後の果菜類では畝に直射日光が当たり、地温が上昇しやすいため、敷きワラの効果が大きい。 ウ 追肥 夏秋栽培の果菜類では、収穫最盛期を迎えるため、肥切れさせないよう肥培管理を徹底する。追肥は7～10日間隔で、1回当たり窒素成分で2～3 kg/10aを目安とし、草勢の状態により時期や量を加減する。粒状肥料を追肥する場合は、乾燥した土壌では肥効が期待できないので、施用後にかん水を行う。 エ 摘果 着果負担を軽減して草勢の維持を図るため、果形を見ながら摘果を行う。 きゅうりでは、商品価値の低い曲がり果等を早めに摘果することで茎葉の伸長が良くなり、着果促進にもつながる。 オ 病虫害防除 多湿条件下では、疫病、灰色かび病、軟腐病、褐斑病、葉かび病、べと病、炭疽病、斑点細菌病等が発生しやすいので、早期防除に努める。また、病葉や老化葉は天気の良い日に適宜除去し、通風や採光を良くする。

項 目	作 業 内 容
(2) いちごの炭疽病防除	生育初期にアブラムシ類、スリップス類、コナジラミ類を寄生させると虫媒伝染性のウイルス病に感染し、被害が甚大となる可能性がある。このため、定植時の粒剤施用やほ場周辺の雑草除去を励行する。また、今後、早い作型の果菜類の近くに新たな同種の果菜類を植えると、虫媒伝染によるウイルス病の被害を受けやすいため、なるべく離れたほ場を選定する。 感染株の早期発見・除去や定期的な薬剤防除を行うなど、以下の点に留意し、炭疽病の発生およびまん延を防ぐ。 ア 炭疽病の症状（写真1） （ア）発病初期にはランナーや葉柄に、両端が明瞭にくぼんだ黒色の斑点が見られる。葉にうすい黒色のシミ状の斑点を生じた時は、胞子はすでに周囲へ飛び散っており、2次伝染（まん延開始）している。 （イ）株全体が萎れた株のクラウン部を切ると、不整形に褐色の腐敗が見られる。 イ 防除対策 （ア）炭疽病に罹病していない健全な親株を準備する。親株床は今まで炭疽病が発生していないほ場を使うか、親株床を土壤消毒しておく。 （イ）苗床をよく観察し、炭疽病の症状の見られる苗は直ちに処分する。罹病株をそのまま放置すると、周囲の株に感染拡大し、壊滅的な被害を受ける場合がある。 （ウ）多肥や過かん水による多湿を避け、株を健全に保つ。 （エ）降雨前後を中心に定期的な薬剤散布を行い、発病とまん延を抑制する。発病前は予防的な薬剤、発病後は治療効果のある薬剤を主体とし、作用性の異なる剤をローテーションで用いる。 （オ）雨よけハウスを利用し、炭疽病まん延抑制効果の高い底面給水育苗システムの導入を図る（写真2）。

項 目	作 業 内 容
(3) 冬春施設野菜の太陽熱利用による土壌消毒法	
	写真1 発病初期（左図：葉、葉柄）と萎凋症状（右図）
	 写真2 愛媛農水研方式底面給水育苗
	冬春施設野菜では、栽培終了後に太陽熱消毒を行うことにより、土壌伝染性の病原菌をはじめ、センチュウ類だけでなく、雑草類の種子も死滅させることができる。適期は、梅雨明け後から8月20日頃である。 （手 順） （ア）有機物（切りワラ、緑肥作物等）を10a当たり1～2t、ほ場全体に施用し、石灰窒素を10a当たり100kg、全面施用する。 （イ）ほ場全体を深く耕うんし、畝幅70cm、高さ25cm程度の畝を立てる。 （ウ）畝間に水を引き、畝全体に水分が浸透するよう湛水する。 （エ）透明な古ビニルでハウス内の地表を全面被覆し、周りを土で押さえて密閉する。 （オ）ハウス全体をビニルで被覆して密閉し、20～30日間置く。 （カ）処理後はハウスを開放し、土壌被覆のビニルを除去し、土壌を乾燥させる。

項 目	作 業 内 容
(4) さといもの 梅雨明け後の かん水管理	(注意点) (ア) 効果を高めるため、処理期間中、土壌を乾燥させないようにする。 (イ) 晴天が続くと、ハウス内は高温となり窒素分解の過程で有毒ガスも発生するため、ハウス内へは立ち入らない。 (ウ) 20cm までの深さの地温が 40℃以上になることが必要である（糸状菌は 45℃、6 日間で死滅するが、地中深い所に生息する細菌等には効果が低い）。 (エ) 有機物等の施用ムラや耕うんムラ、地表面およびハウスの密閉不足等は消毒ムラの原因となり、その部分が病害の発生源となるので注意する。 (オ) 機械や配管等は、ハウス密閉による高温によって、故障・変形する場合があるので、あらかじめハウス外に持ち出す等の処置を行う。 (カ) 処理後は pH、EC、無機窒素を測定し、pH 矯正や適宜減肥を行う。 (キ) 処理後の耕起作業は再汚染しないよう慎重に行う。 さといものは水を多く必要とする作物であり、特に、地上部の生育が最大となる 8 月中下旬までは土壌を乾燥させない管理が重要である。植物体の水分が不足すると葉焼け症状が発生し、芋の肥大に悪影響を与える。 梅雨明け後は、土壌を乾燥させないために畝間かん水を実施する。かん水頻度は、晴天が続く場合は 3 日に 1 回程度実施する。また、かん水は夕方の涼しくなった時間帯から入水し、翌朝には水が引いている状態が望ましい（根傷み防止）。  写真 3 葉焼け圃場（左図）と正常圃場（右図）

(作成 農林水産研究所)